

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 13 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20530691

研究課題名（和文） 西洋養生思想における「身体」と「心」の教育概念史

研究課題名（英文） History of educational ideas concerning body and mind in Western classical dietary texts.

研究代表者

白水 浩信（SHIROUZU HIRONOBU）

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：90322198

研究成果の概要（和文）：

本研究は西洋養生思想における「身体」と「心」に関連する語彙を整理したものであり、西洋古典を集録したデジタル・アーカイブを活用し、語彙用例を網羅的に抽出することによって遂行された。ラテン語 *anima* と *animus* の違い、また *anima* を養うものとしてのラテン語 *educatio* 及びギリシア語 *trophe* が用いられていたという知見を獲得した。さらに近現代の心身一元論の例として 19 世紀西欧骨相学と 20 世紀アメリカ精神衛生運動についても検討し、古代養生思想との比較考察をおこなった。

研究成果の概要（英文）：

The vocabulary of body and mind in the Western dietary tradition is collected and analyzed by using the digital archives of classics in this research project. Through the project we achieved the historical view and knowledge concerning the difference of usage between *anima* and *animus* in Latin, and the origin of education. Latin word *educatio* meant to nourish *anima* as life, and it was bound to *trophe* in Greek. In addition, we examined two examples of modern psychosomatic theory, phrenology in the 19th century Europe and mental hygiene movement in 20th century U.S.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育思想

キーワード：教育概念史、身体、心、養生論、西洋古典、能力概念

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、治安や雇用、健康に対する様々な社会不安を背景に、これらを「心の教

育」の充実によって解決を図ろうとする動きが過熱してきていた。このような視座は、家庭、学校現場はもとより、教育行政、NPO

といった教育実践領域全体に共有されつつあり、心理学・精神医学に先導される形で教育学の思惟のあり方にも隠微な影響を与えてきた。このような現状を前に、安易な、そして無批判な教育の心理主義化・医療化を批判し、「心の教育」の限界を見極めようとする議論もまた、臨床現場からさえ試みられつつあった（大森与利子『「臨床心理学」という近代』2005）。このような「心」を過大視する現代の教育観を醸成してきた歴史にまで降り立った根本的な研究は、当時、なお緒についたばかりであった（Cohen, S., *Challenging Orthodoxies*, 1999）。

以前、研究代表者は西洋養生論史研究に従事し、その成果として、西洋古典における養生思想の経験性、それに基づく身体鍛錬による精神の静穏の追求、さらに西洋では古代ギリシアよりすでに機能分化させられた身体—精神観がみられ、その近代における機能分化の過度の進展が養生論を解体へと導いたことを明らかにしてきた。その上で仮説として、近・現代の教育の心理主義化・医療化はその極北にあって、身体と精神の細分化を自己目的化することによって継続しているのではないかという新たな課題提起をおこなった。

本研究はこの成果を継承発展させ、新たな作業仮説を検証すべく、西洋古典における養生思想をその源流にまで遡り、「身体」と「心」の関係を網羅的に整理し、「身体」と「心」の教育概念史として画定することを目指したものである。その上で、近・現代の機能分化した特異な「身体」と「心」の関係形成に大きく与った思想体系、特に医学、衛生学、心理学の身心観との異同を明らかにし、西洋教育思想史研究の進展に寄与しようとしたものである。

2. 研究の目的

(1) 西洋古典における養生論文献を繙き、「身体」と「心」の関係について、これら関連語彙をも含めて用例を抽出、考察し、教育概念史として整理することを目的とした。研究開始当時、ラテン語文献の電子化が相当進んできたので、そうした電子コーパスや従来のマイクロ史料の整備によって可能になった網羅的検索手法を用い、古代から中世にかけての「身体」と「心」に関連する語彙とその用法を分類し、データベース化を試みることにした。その上で、西洋古典における伝統的養生思想にあって、「身体」と「心」の関係がいかなるものとして想念されていたのか、史料に即して具体的に明らかにすることを目指した。

(2) 西洋古典に関する(1)で得られた知見をもとに、近代の教育的、衛生的配慮がいかなる「身体」と「心」の関係を前提に議論され、

どのような特徴を有するののかについて比較考察することをも目的とした。この点に関して研究代表者は、すでに国家統治と教育—衛生—治安の関係を歴史的に検討してあったので、その成果と併せて、近代教育思想における「身体」と「心」の関係の特異性を浮き彫りにすることをも目指したのである。

3. 研究の方法

本研究は、次の作業によって展開された。(1) ラテン語文献コーパス (Bibliotheca Teubneriana Latina, Ver4)を用い、西洋古典における養生論関連文献をピックアップし、「身体」と「心」に関する語彙を検索、整理する。

まずは「身体(corpus)」、「心(anima, animus, mens)」を検索する。それぞれの該当箇所に関して、Teubner 叢書、Loeb 叢書等を参照し、ラテン語原文に即して意味と文脈をおさえ、属性（著者、作品名、ジャンル、時代等）とともに整理する。

(2) (1)の作業と並行して、18世紀末から20世紀初頭にかけて成立した、近代衛生学、精神医学、心理学特有の身心観と比較考察する。そのことにより、近代以降の「身体」と「心」の関係の特徴およびその教育観の特異性を浮き彫りにしていく。

① 19世紀初頭にF・J・ガルによって創始され、J・C・シュプルツハイムらに引き継がれていった骨相学(phrenology、元の意は「心の学」)について分析を行う。骨相学はアメリカ公教育の父ホーレス・マンをはじめとして、19世紀欧米の教育界に多大なる影響を及ぼしていた。その身心観を伝統的養生思想のそれと比較検討することは、現代の「心の教育」の歴史的淵源を探ろうとする本研究の関心にとって非常に重要な課題となる。(研究協力者：平野亮)

(2) 20世紀前半、アメリカに端を発した精神衛生運動に関する文献を収集し、この運動を主導したアドルフ・マイヤーにおける「身体」と「心」の特異な関係を分析する。また精神衛生運動が新教育運動に与えた影響についても分析し、その歴史的意義を考察する。(研究協力者：楊鋁)

4. 研究成果

研究を開始した2008年度、まずはBTL-4を活用し、「身体」と「心」に関連する語彙・用例を抽出、整理した。特にラテン語animaとanimusに焦点を絞り、動詞に注目しながら文脈を確認し、用例の整理・検討をおこなった。予想どおり、animusとanimaに限定しても、BTL-4から抽出される用例は膨大な件数にのぼることが判明した。そこで、まずは試行的にセネカの著作群に的を絞り、用例の整理作業に着手した。セネカの著作群に限定

してもなお、anima で 150 件程度、animus に至っては優に 750 件を超えることが明らかとなった。これらをすべて、作品名、該当箇所、文例、屈折の特定、文脈（意味）ごとに整理し、必要に応じて日本語訳を付したものを一覧表として作成したことは初年度の大きな成果であった。セネカの anima と animus の用法を仔細に検討するなかで明らかになったことは、anima は専ら「生命（息）」という意味で用いられるのに対して、animus は「心（精神）」ひいては「知性」という意味で用いられていたということである。しかもセネカは anima に関しては所与としてあたかもいかんともし難い自然に相対するかのようには語る一方で、animus に対する配慮、鍛錬については盛んに議論を展開し、好対照をなす。セネカによる anima と animus、そして corpus の関係については、「ルキリウス宛書簡集」58 が、概念整理を踏まえた議論が展開されており、極めて参考になった。

2009 年度以降もラテン語語彙の用例分析及び整理を継続し、特にキケロ、クインティリアヌス、コルメッラの著作群を取り上げ、しばしば無造作に「教育」と訳されてしまうラテン語 *educatio* 及び *disciplina* との関連をも調査し、用例検索を続行した。その際、キケロの著作に関しては、プラトンの影響が顕著であるので、プラトンの著作との照合も必要となった。かくしてギリシア語語彙とラテン語語彙を比較検証するという、当初の研究計画から一歩踏み出した作業に乗り出す形となった。ギリシア語とラテン語を対照する作業にあたって、『旧訳聖書』のギリシア語訳とコイナーで書かれた『新約聖書』、これらをウルガータと呼ばれるラテン語訳『聖書』と照合する作業は極めて有意義な知見を与えてくれるものであり、その成果を一覧表にまとめておいた。得られた知見は以下のように列挙しうる。

- ① ラテン語 *educatio* はギリシア語にはほとんど対応していないことが明らかになった。はむしろ *disciplina* と訳されているケースが少なくない。
- ② *educatio* は人間に限定されるものではなく、むしろ動植物をも含んだ生きとし生けるものすべて、すなわち生命、特にその身体を養い育てる文脈で用いられている場合が圧倒的に多い。
- ③ そのことから *educatio* に対応するギリシア語はむしろ である と推定される。このことは、西洋古代における教育概念形成史を理解する上で、重要な知見である。
- ④ 西洋養生思想における教育概念形成史という観点から言えば、〈教育 (*educatio*)〉はまさに養生思想の文脈のなかで理解さ

れていたと言ってよい。

※ 例えば 16 世紀の英国家政論には、ラテン語から英語に移植されたばかりの英語 *education* のごく初期の用例を確認することができる。そこでは古代から中世へと継承された養生論の文脈がなお健在であり、授乳メタファーによって *education* を語る傾向が認められる。なおこの点については、柴田賢一「初期近代イングランドの教育に関する文献」（『教育科学論集』第 12 巻、2009 年、19-26 頁）として発表されている。

- ⑤ したがって *education* の原義を「能力」を引き出すことに求める見解は謬説であると言わねばならない。このことは、いつ、このような語源解釈が生じたかという新たな研究課題を提起するものである。

なお、これらの研究成果の一部は、白水浩信「教育・福祉・統治性—能力言説から養生へ」（『教育学研究』（日本教育学会）、第 78 巻、2011 年、50-61 頁）として発表されている。

本研究では、近代以降の身心観と比較検討する作業の一環として、19 世紀骨相学及び 20 世紀アメリカ精神衛生運動という二つの各論も手がけておいた。まず平野亮（研究協力者）の研究支援により、骨相学について取り上げることができた。近代における顕著な心身一元論である骨相学は、人間を脳機能に還元可能とされた能力 (*faculty*) の束として捉え、能力を表象する用語法、能力の分類、能力の特定と識別、頭蓋測定を通じた能力の間接的計量といった近代教育学の基本的思惟を規定する語彙と思考枠組みを用意するものであった。骨相学とは、西洋における心と身体の学、すなわち観相学、能力心理学、解剖学を接合する能力人間学であった。この点に関する研究成果は、平野亮「F・J・ガルの学説に見る骨相学の人間観」（『神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要』、第 4 巻第 1 号、2010 年、37-46 頁）として発表されている。

それから楊鏗（研究協力者）の支援により、20 世紀アメリカの精神衛生運動についても取り上げることができた。この運動を率いたアドルフ・マイヤーの精神医学の構想もまた、現代における顕著な心身一元論と見做しうる。骨相学が脳機能に「心」を還元したのに対して、マイヤーは習慣化された行動において心と身体を結びつけようとした。それゆえ、マイヤーは社会適応する習慣の再形成を治療として採用し、ひいては家族及び学校における習慣再形成を旨とした教育を通じて、法や制度をも含んだ社会全体を衛生的に改造しようと企図したのである。このことは、本

研究の初発の関心としてあった、教育の医療化、心理主義化の直接の契機でもあり、アメリカから日本にわたる教育的思惟を今日もなお隠微に規定してやまない。なお、この点に関する研究成果は、楊鏗・白水浩信「アメリカにおける精神衛生運動と教育—アドルフ・マイヤーの精神衛生論をてがかりに」(『神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要』、第5巻第2号、2012年、47-54頁)として発表されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 楊鏗・白水浩信「アメリカにおける精神衛生運動と教育—アドルフ・マイヤーの精神衛生論をてがかりに」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要』(査読有)、第5巻第2号、2012年、47-54頁
- ② 白水浩信「教育・福祉・統治性—能力言説から養生へ」『教育学研究』(日本教育学会)(査読有)、第78巻、2011年、50-61頁
- ③ 平野亮「F・J・ガルの学説に見る骨相学の間観」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要』(査読有)、第4巻第1号、2010年、37-46頁
- ④ 平野亮「19世紀西洋における骨相学の間観」『日本教育学会第68回大会発表要旨集録』(査読無)、2009年、172-173頁
- ⑤ 柴田賢一「初期近代イングランドの教育に関する文献」『教育科学論集』(査読無)、第12巻、2009年、19-26頁

[学会発表] (計2件)

- ① 白水浩信「教育・福祉・統治性—能力言説を越えて」民博シンポジウム「ケアと育みの人類学の射程」、2012年1月28日、国立民族学博物館(大阪府)
- ② 平野亮「19世紀西洋における骨相学の間観」日本教育学会第68回大会、2009年8月28日、東京大学(東京都)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

白水 浩信 (SHIROZU HIRONOBU)
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・
准教授
研究者番号：90322198

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

柴田 賢一 (SHIBATA KENICHI)
中九州短期大学・幼児保育学科・助教
研究者番号：90615212

楊鏗 (YANG ZENG)
上海大学・中国社会転型与社会組織研究センター・講師

平野 亮 (HIRANO RYO)
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・
博士課程後期課程(院生)

島野裕子 (SHIMANO YUKO)
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・
博士課程後期課程(院生)